

# 方言文明史観

## 一、「文化としての方言」から「文明としての方言」へ

### 1、新しい価値観から方言を見直す必要性

平成六年から平成十二年にかけて、筆者は一人で全国都道府県四十七の村を歩いて「あいさつ表現儀礼」の方言調査を試みた。つづいて平成九年から平成十三年にかけて、全国五百余の地点について、実地調査形式の通信調査を実施した。

それらの結果の一部を平成十二年にポーランドで開催された第三回国際方言学者・地理言語学者会議で講演し報告したことがある。その会議で筆者は、「朝家族の出会いのあいさつ表現儀礼」が村には無く、都市にあるという事実を発見し、その原因が、昭和四十年代の核家族化・洋風建築化・人口の都市集中化などにあると解釈し指摘した。すると、ポーランドにも同じ現象があるとの賛意が述べられ、アジア地域にも同様の状況が見られることが後で分かっただ。

## 江端 義 夫

かつては、数世代の家族構成員が間仕切りの無い茅葺きの家に同居していたものである。だから、家族の構成員同士の意識に一体感が見られ、身振りやしぐさで相手の言いたいことを推量することが容易にできたのである。しかし、居住形態の変化に伴い、ヨーロッパでも日本でも、マイホーム化が進み、プライベートな個室を持つことが望まれるようになった。こうなると、家族間の意志疎通でさえ容易ではなくなるし、声を掛け合わなくては関係の維持さえおぼつかなくなる。

さて、文明の進化にともなう言語行為の変化については、地域の特異性とか伝統とかでは解釈できない次元のこととして、新しく考えなくてはならない事態が生じたと言えるのである。つまり、これは、ヨーロッパだけの特別な現象でもなく、日本だけに特別な現象でもないからである。すなわち、「家族の朝のあいさつ儀礼をしない」という「無の文化の共有」は、文化という個別の地域現象では説明できないことなのである。言い換えれば、「居住形態の都市化」が経験されているか否かということが大事な指標だということが判明する。

こうなると、もはや地域方言や社会方言だけで方言を規定してきた従来の定義では、筆者の「あいさつ表現儀礼の研究」についての説明は不可能であり、これは、そういう枠組みをはるかに逸脱してしまうことが明らかになった。そこで、「あいさつ言葉の研究」は、当然、方言研究のほずであるから、方言を文化と見なす従来の狭い考え方を改め、あいさつ表現などの方言を広く文明と見なす考え方が必要になってきていることを指摘しなければならなくなったのである。

## 2、方言文明史観

昭和五十三年に、国立大学協同利用機関である「放送教育開発センター」からの依頼を受けて、広島大学放送教育実験実施委員会は、公開講座「方言と文化」を企画することになった。筆者はたまたまその企画の世話係りを担当することになり、「方言と文化」という課題について考えることになった。折りも良かったので、従来の言語学体系で常識とされていた「音韻・文法・語彙」という平凡な枠組みではなく、その当時流行していた文化人類学的な視点を包括した総合的な視点での枠組みを構想する試みをした。それらの成果は、後に『日本語方言学―その課題と方法―』（東京堂出版）となり、先のテキストを一部修正した上で、刊行された。

確かに、「方言と文化」という課題は、昭和五十年代の学問が求めていた時代の欲求によく適合したものであったと思われる。たとえば、梅棹忠夫氏や中根千枝氏、山口昌男氏、本田勝一氏、川田順造氏、加藤秀俊氏、青木晴夫氏やマリノウスキー氏らの成果が眩い

ばかりの絶賛をもって迎えられた時期だからである。その「文化」には、新鮮な魅力があったのである。それ以前の「文化住宅」などに見られるところの、少し洒落た住居という意味ではない。そういうイメージとは異なり、昭和四、五十年代の「文化」には、地球規模で自己を見直し発見しようとする「知」の狩人のイメージが見られた。すなわち、異質な民族や異なった地域の風俗や習慣についての「知」を貪欲に求め記述し、地球上には、いろいろの人類が共存しているもののだと認識する、そのような相対観を満足させるための「文化」であった。

その後、二、三十年が経過し、地球上に生きている人類の生態が、かなり詳しく分かるようになった。

また、科学技術の進歩によって、特に「電気」の普及により、生活は一変したように思う。ガソリンの利用はめざましく、動力を利用して遠くへ飛行したり、自動車旅行をしたりする余裕もできた。

このように、人間の生活の社会的な枠組みを日常的に壊していく「文明」という模様が存在し、それらが、従来の「人間の文化」の枠組を大きく変革しようとしていることに気づくようになったのである。

今までは、

飛鳥文化、天平文化、北山文化、南蛮文化、縄文文化、物質文化、照葉樹林文化、精神文化、政治文化、児童文化、オホーソク文化、マドレーヌ文化

のように、ある時代やある地域、ある領域に限ってまとまりのある様式の全体が「文化」と見なされていた。その用語は非常に多様で

あり、今日でも方言が「地域文化」とされているのでも容易に理解される。

これに対して、「文明」という用語は我々の周囲に極めて少なく、福沢諭吉の『文明論之概略』や梅棹忠夫氏の『文明の生態史観』くらしいか管見に入らない。ちなみに『広辞苑』四版で「文明」という語彙を探してみると、

機械文明、物質文明、エーゲ文明、キクラデス文明、クレタ文明、ミケーメ文明、ミケナイ文明、ミノア文明、ミュケナイ文明

が見いだされた。「文明」を表現した馴染みな語句には出会わなかった。いわば、「文明」なる用語は、歴史上から姿を消した特定の民族生活の総体をさして言うようであり、しかも日常生活とは縁遠いものと認識されているようである。しかし、先にも指摘したように、我々の生活を革新的に変えているものは、「文明」の力である。その「文明」に心を寄せなくては、日々に変化しつつある方言を考える学問として不十分だと考えるのである。

以下では、筆者が考えるところの「方言文明史観」について、具体的に説明してみたいと思う。

## 二、方言共時態でも通時態でもない理知態

### 1、縦系でも横系でもない文明模様

有名なスイスの言語学者、フェルディナン・ド・ソシュールの『一般言語学講義』では、言語の研究を共時態と通時態に分け、

特に共時態での研究を優先すべきことが説かれている。この考え方が二十世紀を牽引してきたと言っても過言ではない。十九世紀が通時態の世紀だったのだから、次に続くのは、当然、共時態の世紀であることは、世の常であろう。さらに次の二十一世紀は、二十世紀のアンチテーゼだとすれば、通時態へ回帰すると予想される。しかし、筆者は別の考え方を提示したいと思っている。すなわち、共時態を示す横系と通時態を示す縦系とを繋ぐ文明の模様というものが無ければ、真の言語文化は成り立たないと理論的に考えているのである。

たとえば、寒さを凌ぐ衣服というものがある。これは、生きていく上で欠くことができないものである。しかも、地域文化の色合いを反映して、様々な様式ができている。まさに、人類の多様な文化を証明する文化項目又は、文化指標と見られている。生活の視点で衣服を見れば、共時的な記述になるし、その衣服の交換儀礼について考察すれば、民族社会を超えた文化人類学的で通時的な考察が見られるであろう。柳田国男の「蝸牛考」や「木綿以前のこと」「海上の道」などは、民俗学のようにありつつも、筆者にとっては、文化通時論に思えてならない。どこからどこへという「動き」が問われているからである。これは、縦系と見なすことができるものである。

ところが、ここで筆者が文明模様と言うのは、縦系でもなく横系でもなく、縦と横とを行き交う模様それ事態のことである。いわば、超時間であり、超空間である。

別の言葉で言えば、確実に時代を進化させる方向にしか進まない

原則が見える。そういう永遠な進化論の宿命を持つとも言えるし、そのような性質を持つていても言える。動物は出鱈目があり得るが、改良したり発明したりすることは出来ないで、文明ということとは無縁である。少なくとも、動物は言語という文明のしわざには、関与しない。そのような体系と儀礼とを持つ行為は、文化の所産としての伝統に裏打ちされていなくてはならない。その点で、文明模様は、歴史的な伝統を踏まえる必要があり、極めて人間的なものである。

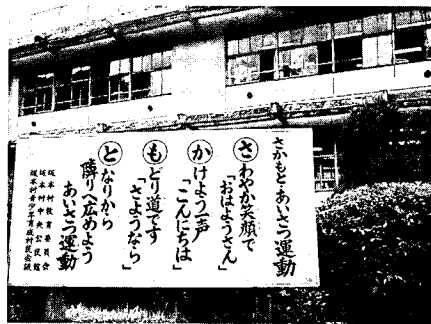
## 2、進化態としてのプロセス

たとえば、共時態と通時態とのアウフヘーベンされたところのものを文明模様として見つめるとすれば、それは進化態としか言いようがないものではないだろうか。

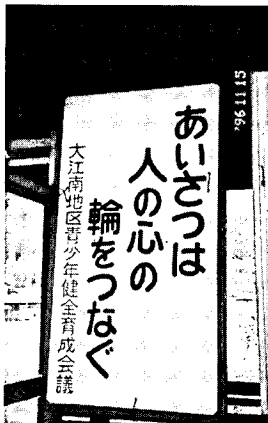
具体的な例を挙げれば、人の出入りの無い閉鎖された村社会という単位が通用しなくなっているのに、学校では、朝、人に出会ったらいさつをしなさいと教えられている。村社会では、全国各地の自動車ナンバーをつけた車が走り、知らない多数の人が行き交う村で、知った顔と出会う場面などはほとんど無い。村の伝統的な職業についている家では、各戸に二台以上の車があり、近くに仕事へ行く時にでも、歩くことなどはしない。田舎では、歩く人の姿をさっぱり見なくなってしまった。そういう村社会において、「あいさつ励行」が奨励されているのは、村社会の内的変化に慨嘆した人々が、過去の濃密な人情だけをとりもどそうと喘いでいる姿と解釈される。全国各地の田園に掲げられた立て看板には、「あいさつ

励行」の標語が、村の小学校とか教育委員会とかの責任で次の写真で見られるように建てられている。

(熊本県坂本村 一九九六)



(三重県勢和村 一九九六)



このような現実について、どのように説明したらいいか。すなわち、枠組みとしての村の「言語共同体」が鎖国性を持たなくなったのに、村人は、昔の状態を取り戻そうとして、もがいていると筆者としては、解釈しているのである。

このような状態は、人に声をかけるという行為が、「知り合いだけに限られる」というルールが共有されているからである。さらに進んで、「知り合いでない人にも声をかける」という新しいルールを作ればいいのに、それは、日本人全体のルールに反するので、そこまでは踏み込めないのである。

ある時代からある時代への変化を見据えないと、このような言語の実態には気づかないし、違和感さえ持たないにちがいない。しかし、その原因がなぜなのかは、難しいけれども、確実に進化するプロセスの中でこそ構築されるものだと言えるのである。これを進化態としてのプロセスと説明することができようであらう。

### 3、体系としての静止態でなく、行為としてのエネルギー

音韻の体系や二音節名詞のアクセント体系とか動詞の活用形の体系とかのように、閉じた体系が明確に見いだされるものがある。それに対して、ここで、理知態とでも仮に言おうとしているものは、ヌエのようなものであり、文明の模様であるから、可視できても容易に自分の力だけで改変できるものでもない。拘束されたり、束縛されたりすることはあっても、自分だけではそれを否定しきれないものである。

これと類似なものに「しぐさ」がある。たとえば、村社会では、

一度ならず数度までも、お辞儀をして、遠くからでも気づいていることを相手に知らせ、これを礼儀として認知している。そんな時に「知らない振り」をすることは、許されない。それどころか、そのような「しぐさ」が生来の土地の文化として身につけているものである。このような「しぐさ」という記号をも言語の範疇に入れれば、方言文明の一項目として取り立てることは可能であらう。今後の課題である。

### 4、景観としての鎮守の森又は大聖堂

宗教を文明と見なすか文化と見なすかは大きな難問である。いずれにしても、これは人間にしか見られないもので、生き方そのものでもあると言って良い。又、生き方を規定しているし、時代ごとに変容してきてもいる。宗教を持たない民族は無いし、仮に宗教が禁じられていたソビエト時代にも、それに代わる共産主義というイデオロギーが存在していた。何かしら、集団をまとめあげ、結束させる精神的な絆が宗教である。

その宗教の例として神社が挙げられる。日本の神社が村社会の外れに位置していて、村の全体を掌握していることが景観の上から確かめられる。他方のキリスト教などでは、中世ヨーロッパの教会が村の中心地に建てられ、十字架が空にそびえ立っているのを見ることがある。

ところが、宗教よりも経済だという信仰が近代になると人々の欲望を支配し始める。すると、途端に都市の景観が違ってくるのである。たとえば、アメリカのニューヨークなどでは、中世ヨーロッパ

諸地方で見られた教会中心の都市国家の景観ではない。数十階建てのビルディングが林立する世界最先端の理知的な都市景観である。これは、教会の屋根をはるかに超えた高さの建物になっている。これを見て、神を冒瀆しているとか、神を汚したとかとの観念を持たなくなっていることが注目される。そういう認識が、新しい文明観を支えていると言えるであろう。

## 5、物質文明としての機械化（自動車）、経済発展指標としての

### 流通

地方では、土地人同士が言葉交わす機会が減った。その原因の一つは、文明の発達である。すなわち、人力に頼っていた農業が、機械化により、家族の労働力を必要としなくなり、子供や老人の力を借りなくても農業が営めるようになった。しかも、週末に機械で一氣に仕事をしてしまえば、短期間に仕事が終わる。農業は、きわめて個人的な労働で事足りるので、仲間うちの間関係を顧慮する必要がなくなった。現代では、農業が個人の遊技、あるいは、余暇に行うついでの仕事になってしまった。

このように農業が個人作業に変質すると、今まで村社会の行事として農繁期を設定し、義務教育機関で農繁期休暇を設けていた地域での一体的な生活形態が見直されることになる。又、村で互いに助け合い、田植えや稲刈り、収穫祭、村芝居などを行ってきた集団的な行事が実施されにくくなる。その結果、村では、互いを気遣って行動する習慣が薄れてきたのである。

都市と異なり、地方には人々が互いに助け合わなければやってい

けない領分があると見られていた。たしかに、昔は大事な話題については夜を徹しての寄り合いがあり、一人の反対意見も無くなるまで、根気よく話し合う決まりがあった。村の一体性が存在し、それゆえの結束力につながる一面もあった。今はそれさえ無くなり、簡略化されている。

ところで、村と都市とを区別する明確な指標は、意外に少ない。むしろ、そういう地域や世代を超えて、機械化や自動車や交通機関や道路の敷設などのように、目に見える形での文明指標の方が、著しく方言そのものを変えてきていると筆者などは考えている。

昨今は、右に述べた文明の基本に「流通」という用語でくくることの出来る数値が、それを代弁してくれる。以前は物と物とを交換するための交易量が方言に大きく関わったとされる。同じことを流通と言ってみたい。その流通という交流、コミュニケーションは、昭和四十年代以前と以後とで、格段の差があると見られる。すなわち、昭和四十年代以前の日本各地には、地域毎に個別の生活形態があった。たとえば各戸で、それぞれの味噌を作り、自給自足に近い経営を誇りにしていた。しかし、均質化や共通化が進み、誰でも何処でも同じ生活をするのが幸福だと見られて、今日まで突き進んできた。方言を根本的に考えようとする時には、このような文明の視点で国民の価値観の転換として非常に大切な指標になると考えているのである。

## 6、変動理知態としての方言文明史

方言区画というテーマは東條操氏が唱え始められた独特の思想で

ある。行政区画があるように、方言にも方言区画があつてよいはずだというのは、もつともな考えであろう。

しかし、地球上の国家が互いに国家間の境界線をどこに引くかという事で、常にもめていている。それと同様に、現在の方言区画の実態も江戸時代の藩政の区画を色濃く反映してはいるものの、明治になつてからの廢藩置縣による区画をも強く打ち出すようになってきている。方言の区画の実態は、どういふ言語事項を持ち出すかによつて違つてくるし、確定的なものはないはずである。ただし、今の方言学界の定説は、東條操氏のものか金田一春彦氏のものかかといずれかとされている。それがめやすになつてゐる。

さて、欧米でも方言境界線という思想は早くから見られ、十九世紀の終わりには、ゲオルク・ヴェンカーも自分の言語地図に区画線を書き込んでいる。その点で、これらの思想に歴史的な共通性が見られる。ただし、筆者が言いたいのは、それが固定的な思想であり過ぎたということである。取り上げる言語事項で異なる区画線をもつ四十年もそのまま、東條操説として引用し続けている現実には、驚嘆する。たしかに、東條先生は優れた学者であり、立派な人格者であり、尊敬の的だと思われる。しかし、東條氏の説には、区画線の手続きが書かれていないし、具体的な方法が記されていない。名人芸なのである。その点では、多くの先学にもこれは、共通して見られる点である。誰もが納得する客観的な説は困難かもしれないが、中学生にでも分かる手続きによつて、方言区画が示されることを期待したいと思う。

ところで、筆者は、昭和四十年以降の日本方言状態は、文明の進

歩に影響されて、著しく変化したと見ている。したがつて、固定的に方言区画を考えるのではなく、変動理知態とでも言うべき思想に立ち、大きな時代の断層がある時を境にして、改編しなおすという柔軟さが要だと考えるものである。これが、変動理知態としての方言文明史から見た一つの発言でもある。

### 三、方言文明史観

1、地域の方言探しを目的にした方言研究からの脱皮

北海道の方言と言へば「シバレル」、名古屋の方言と言へば「オソギヤー」、京都の方言と言へば「オイデヤス」、大阪の方言と言へば「モーカーリマツカ」、広島の方言と言へば「ガンス」、沖縄の方言と言へば「メンソール」などのように、その地域で特色のある語彙や言い方を取り出して、もの珍しそふに品定めをするのが方言研究だと考へている向きがありはしないだろうか。そして、地域の特産品や名産品を弄ぶような心境で、これを得意がたり、謙遜したりしてはいないだろうか。

このような、観光物産品としての方言は、地域の観光「のれん」や観光「手拭い」に相撲番付として印刷され、観光品売場で売り出されている。「さらしもの」扱いにされている方言語彙を見るにつけて、バナナの叩き売りを見ているような不自然な印象を受ける。

「そんなものが方言ではありませんよ」と不満を申し述べたい衝動にかられる。

方言について人々が抱く感覚は、右のような地域特産品のレベル

でも仕方がないと諦める。しかしいずれは、人間の生き方と一体的な行為そのものとして方言を考えなくては、真に方言をとらえることにはならないと悟る時が来るであろう。方言について、夜店の品を茶化して通り過ぎる趣味人であった期間が長過ぎはしなかっただろうか。

学校教育で、夏の宿題として、昆虫採集や植物採集を課題に出してきたように、方言が珍奇な異質物の代表みたいに扱われ過ぎたのである。それは、間違つた方言観なのである。これを止めない限り、本当の方言観は育たない。

## 2、普遍的方言法則の探求へ

たとえば、「鼻」という語や「口」という語にはどうして、地域による異なつた語形がないのであろうか。また、「竹」とか「森」とかの語にも地域による方言が無い。二千年の間に変化する語と変化しない語があり、それがどうしてなのかは分からない。代々を経ても固定して全く変化しないという語が存在することに敬意を表したい気がする。筆者にとつては、本当に変化しないという語があること事態が不思議でならないのである。基礎語と言われるものには、そのようなものがある。

他方では、方言量の多い語がある。有名な「蝸牛」とか、「蟻」「目高」「蛙」「バツタ」「片足跳び」「じゃんけん」などのように子供の遊びに関わる語に方言が多いとされてきた。或いは心情を表現する語にも、土地の方言が多い。「シンドイ」とか「イビセー」とか「エズイ」とか「オトマシー」とかのような形容詞は、複雑な気

持ちを表している。こうした日本語の真骨頂である言い方については、まだ十分に記述されていない。

以上のように語によって、変化しないものと変化するものがある。これはどんな原理によってそのようになるのか知りたいと筆者は思う。そうすれば、世界の方言の変化法則も分かるのではないかと考える。個々の語がどのような舞いをするのかということにも関心はあるけれども、それらを含括して、それらを支配する根本的なルールを知りたいのである。

特に、方言の変化に関わる人知の普遍性について、神様の心遣いがあるのではないかと想像している。神のみの知る叡知を密かに嗅ぎつけたいと思案しているのである。

## 3、精神文化を包摂した方言文明史観へ

方言を文化と考えれば、常識的にそれは、「精神作用」を問題にする領域へ深く入っていくことになる。ある特定の集団が想像した形象が具体的な姿を見せるであろう。

しかし、文明という視点で方言をとらえたならば、それは無限に発展する軌道の上を走る列車になるであろう。しかも、地域や人種や気候や風土を問題にしない歴史観が想定されるはずである。文明と言えば、物質文明にのみ想いを馳せがちであるけれども、本当は、精神文化をも包摂した物質文明の観点で見たいものである。どうしても、精神よりも物質に視点が行かざるをえないのはやむを得ないが、いつも統合のバランス感覚を持つようにしなければならぬ。



#### 四、方言文明史観に立つ国語教育

##### 1、方言の歴史的存在性

人間が誕生する。気がついた時にはすでに、母の言葉の真似をしていて自分を発見する。それが言葉の自覚の始めであろう。言葉は、指紋のように宿命的な事態なのである。自分の言葉のアイウエオの音がどのようなフォルマントなのかは、生まれる前に母胎の中で聞いて覚えるものだと言われている。母を選ぶことができないように、方言を選ぶことはできないのである。そのように方言というものは、人間存在と不可分にして厳粛なものである。

必然的に母の音声の特質を継承して生まれ、次の世代へと自己の音声を変質させつつも、遺伝させていくことになる。

2、国語の正しさを教えるのではなく、言語の普遍的な理知を教えるのが正しい国語教育である

標準語を教えるのが国語教師の役目だと考えている人が少なくない。そして、標準語に対立するのが方言だとし、東京語の真似をするのを自己の仕事だと、まじめに考えているようである。これは間違った考えである。その標準語はどこにあるかと言えば、具体的には、マスコミのアナウンサーがニュースを読むときの言葉だと答える。そのニュースを読む時の非人間的な読みのスタイルがどうして標準語だと言えるのであろうか。恐らく、戦後長い間に自然に形成された従順なレトリックであろう。

標準語という正書法は、単に書くときの基準であり、その他に拡大して適用すべきことではない。話す時の基準に書く時の基準を当てはめることはできない。たとえば標準語の正書法では「聞いた、経営」や「彼は、今日は」や「命を、それを」などの表記を普通の書き方としている。これは現代仮名遣いという国家の規則である。

その標準語の規則がそのまま、話し言葉にも当てはまると安易に考えてしまっているようである。それはいきすぎである。先の例では、ニュースの読み手は、「キータ、ケーエー」、「カレワ、キョーワ」、「イノチオ、ソレオ」と発音する。標準語の書き言葉と話し言葉とを比較してみれば、「い」を引き音に換え、「は」を「ワ」に換え、「を」を「オ」に換えている。この両者にズレが生じていることに気づかれるであろう。そのように言文不一致なのが現代の標準語なのに、その事実を考慮せず、ひたすら音声までも標準語に追随しようとしているのはおかしい。

教師に主体性が無い。すなわち、自己に規範の主体がなく、他の地域の言葉、すなわち、メディアの言葉を模倣することが自己に課せられた正しさの基準だと見なし、それを信じて疑わなかったのであろう。こんな悲惨なことがあつてよいものだろうか。あつて良いはずがない。いつも正しさの基準に怯えていなくてはならないではないか。そんな主体性のないあり方を強いられるのは堪えられないと想像される。

方言を正しくないものと見なし、矯正すべき対象にしてきた戦前からの国語政策が強権的であった。子供が自己の言葉で自分の思いを精一杯述べることが拘束してきたからである。母の言葉をけなし

た上で、どうして心の教育ができるであろうか。言葉に信頼を置く人間教育は、そのような偽物の言語観では困難である。

このように、正しいものと正しくないものとの対比で国語をとらえようとしている国語政策が続く限り、それに追従せざるを得ない国語教育は、常に主体性の無いエセ言語教育にならざるを得ないのである。正しい認識を国語教師は持つべきである。決して東京方言が正しさの基準ではない。正しさの基準は、国語という日本語方言の使い手自身にあることをしっかりと自覚しなくてはならない。

### 3、方言文明史観から見た「高次口述作文」のススメ

どうすることが、言語の自覚なのか。それは、あるまじった内容のことを自分の言葉で言えるかどうかと言うことが、判断の基準になる。そのまじったの表出に地方語が入らざるをえないのは当然であるし、入らなくては自己の身から出た思想とは言えない。その思想には、感情の表出も含まれる。あるまじりの表出となれば、「好き、嫌い、辛さ、痛さ、気分、機嫌、好み、希望」などの自然に湧き出てくる想いは、地域の方言でなくては必要十分な表現にならないであろう。しかも大事なことは、そのまじりのある表現を話し言葉という、生きた音声で表出することができるということではなくてはならない。

とかく、学校教育では、国語授業でまじりの段階になると、作文を書かせてきた。書き言葉はどうしても、借り物の言葉になる。まじりの段階で、自己を偽り、借り物の衣装を着るのを余儀なくさせてはならないであろう。

今後の国語教育の現場では、作文の形で表現するのを止めるべきである。その内容を口頭メッセージとしてみんなの前で、三分とか四分とかの時間で訴えることによって締めくくるのが良いと思う。作文の好きでない子が多い。それは、自己を偽る行為だからである。それに慣れてしまうと、仮面を被ることこそ、実質なのだと誤解して育つことになる。こうなると、現在の国語教育と同じような偽物の国語教育の繰り返しになってしまうのである。

筆者は、国語教育の現場で、ものに書いて作文に書き表す代わりに、その内容を「高次口述作文」にさせている。高次口述作文ならば、どうしても結論を先に言わなくてはならないし、人に想いを伝えるということがいかに難しいかを学ばせることができる。しかも、最も大切な点は、一人一人が異なる音声によって、一人として同じでない個性的な自己を表現する経験をさせることにある。それぞれの生身の声を通して個性を発現することの重要さを自覚させることができる。「高次口述作文」をさせれば、話し手は聞き手に対しての配慮を必要とすることを知る。又、説得することが出来なくては優れた「高次口述作文」ではないということをも、手応えによって自分で判断することができる。従来の作文では、表現の正しさとかレトリックとか、構成の巧みさとかで評価されてきたかも知れない。その非人間性と教師の傲慢さを捨てる必要がある。「高次口述作文」を実施すれば、たちどころに、教室の全員が批評家になれる。拍手の多い「高次口述作文」の方が優れたものであることは明らかである。作文は採点に教師の恣意が入りがちであった。かつ、全員の作文を読み、コメントを書くための膨大な時間が負担であった。それ

に対して、「高次口述作文」ならば、教師の力量は要るけれども、即座の指導ができる。全身で表現してこそ、優れた国語の表現なのだという基本原理を根本に置いて教えらるるであろう。書くだけでは、人間の行為の半分しか評価できていないと考えるべきである。生きた言葉で言い表してこそ、本物の人間表現だというあたりまえの国語教育をするべきである。

たとえば、有名な大統領の演説や、人気のある首相の鮮やかな答弁を例に引けば、言語で訴える力は、決して書かれた内容だけではないことが教えられる。実に演説や答弁の説得力は、声や調子や姿勢や間や繰り返しや人間的魅力などの総合されたものであることが理解されるであろう。

子供たちに、生きた言葉の総合的な力をつけさせたい。そのために、一つの工夫として、「高次口述作文」を提案してみた。このことだけでも、教室に人間の声が戻ってくるのである。有名な作家の作品の鑑賞と作家の文章を真似させるような作文教育を止めなくてはならない。静かな教室から、わいわいががやの国語教室へと転換する勇気が必要なのである。

以上の「高次口述作文」に代弁される国語教育が、全国の国語の授業で実践され、子供たちが生き生きと自分の言葉で、しっかりとものを言うようになれば、日本の国語教育は本物になるであろう。

以上、方言文明史観に立つて、具体的な国語教育の実践のヒントを記述した。このやり方ならば、地球上のどこにおいても試みるこゝとが出来ると。話し言葉に価値を置くようにすれば、訛があつても、アクセントが東京アクセントと違っていても全く関係ないことだと

いうことが分かるはずである。大事なことは、子供の人間性が必要かつ十分に制限時間内で表し尽くせたかという点を評価すれば良いからである。瑣末な言語技術の指導ではなく、子供の個性的な思惟や心情がまとも良く、十全に訴える力を持っていたかという視点に焦点がある。こうなれば、教える者も、教えられる者も、この時間が楽しく待ち遠しいものになること、請け合ひである。

本節での高次口述作文は戦前の「口頭作文」とは異なる。戦前の口頭作文は授業の導入に使用され、低次元のものであった。それに対し、高次口述作文は、成果の総括に相当するものなのである。

## まとめ

本稿で述べたことをまとめれば次の二つである。

一つ、従来は方言を文化現象と見なしてそれを研究の対象にしてきた。そして、それを共時態と通時態の二方向でとらえようとしてきた。それはそれなりの成果があつた。

しかし、筆者は、方言の行為を文明の軸で広くとらえることを提案した。この視点で方言を見据えると第三次元の方向、すなわち、理知態とも言うべき文明模様で方言を研究する内実が髣髴として見えてくることを述べた。

二つ、「高次口述作文」の実践は作文に換わる革命的な国語の授業である。これは、方言という話し言葉を生かした方言文明史観の実践授業である。子供の個性を遺憾なく発揮させる「高次口述作文」の長所について説明した。

(二〇〇二・一・六) (広島大学)